第 58 回　2015 年頭雑記のなかから

年末から 2015 年年始の 9 日間の休日は、近来稀にみる長い冬休みとなった。また、その全期間自宅で過ごしたことも稀な経験であった。「小人閑居して不善をなす」ことがないように過ごすことを心掛けたつもりであったが、その日々が過ぎ去ったいま思うと、充実感が湧かないのである。しかし一方では、短期間といえども静かで暇な自由時間を経験できたことには感謝の念を覚えている。

年末年始の期間中、このところ読みたいと思っていた「ガリア戦記」（カエサル著・近山金次訳・岩波文庫）を読了できたことは、収穫のひとつといえる。「ガリア戦記」は、紀元前 58 年～同 51 年のカエサル（ジュリアス・シーザー；紀元前 100 年？～紀元前 44 年）が率いたローマ軍のガリア（現在のフランス）遠征の際の戦争の状況や結果をローマ元老院に報告した記録である。この戦記は全 8 巻にまとめられており、そのうちの7巻はカエサルによって書かれたとされる。第 8 巻はガリア遠征中部下として行動をともにしたヒルテイウスによってカエサルの死後書かれた。

カエサルは歴史上非常に著名で人口に膾炙しているので、ここに改めて紹介するのがためらわれるため要点のみにする。カエサルは、貴族出身のローマの武将・政治家で、三頭政治と政争、ガリア戦争、ローマ内戦、北アフリカ・ヒスパニア戦役などを経て、終身独裁者となったが、紀元前 44 年元老院会議に出席の待機中に暗殺された。その際「ブルータス、お前もか」と叫んだというシェークスピアの戯曲のなかの台詞はよく知られている。

ガリア戦争は、紀元前 58 年ヘルウエイティー族・ハエドゥイー族・セークァニー族との戦争が出発点となり、52 年のアルウェルニ族の長によってまとめ率いられた現在のほぼフランス全土におよぶ全ガリア族の大部隊との「アレシアの戦争」で終結している。「ガリア戦記」にはカエサルの騎馬軍団を擁するローマ軍の巧妙な機動性、当時としては最新の兵器を備えた軍備、迅速な食料の調達などが記録されている。ガリア戦争に加わったローマ兵がカエサル個人への忠誠心が固かったことも軍団の精強さの特徴のひとつであったことがうかがわれる。

ガリア戦記ラテン語文の翻訳者には敬意を表するとともに、その読了に苦労したのも良い経験であった。

2014 年末に発表された十大ニュースは新聞によっても多少順位は異なるが、世界ではエボラ出血熱の感染者が西アフリカで拡大したことが上位の大ニュースとなった。エボラ出血

熱は、2014 年 8 月 WHO が緊急事態宣言したが、その死者は 12 月には 7,000 人を超え、欧米で医療関係者の感染もおきた。有効な治療法はなく、現在日米やカナダなど全世界で治療薬やワクチンの開発が急ぎ進められているが、まだ実用化に至っていない。

国内の十大ニュースでは、政治や経済などに関するニュースが多かったが、そのほか青色発光ダイオード（LED）を開発した日本の 3 学者がノーベル物理学賞を受賞したことがあった。その一方では、世界で最も権威がある科学誌のひとつ「ネイチャー」に掲載された新たな万能細胞「STAP 細胞」創り出したという理化学研究所研究員の論文が撤回され、科学界を揺るがす事態になったという大ニュースがあった。

ノーベル物理学賞受賞は日本国民のひとりとして非常に誇らしく感じているが、STAP 細胞に関しては、もともと医学関係者である筆者にとっては夢想すらしていないことであり、いろいろな意味で残念であるとしか言いようがない。科学するものにとって得られた現象を直視し、客観的に科学的に解釈することが鉄則であるが、その研究には品性を伴った叡智がとくに必要である。

2015 年 1 月 7 日イスラム教預言者ムハマンドの風刺画を掲載した政治週刊誌「シャルリー・エブト」パリ本社がイスラム過激派に銃撃されて 12 人が殺害された。その容疑者２人はパリ郊外の印刷所、1 人は印刷所から約 40 キロ離れたスーパーマーケットにそれぞれ人質をとって立てこもりの末、警察・特殊部隊により射殺された。この事件は全世界に大きな衝撃を与えた。フランス大統領の呼びかけに応じて、欧州各国のみならず世界各国首脳も参加して 1 月 11 日、民主主義や自由の価値を掲げるために大規模なパリ行進が行われた。大行進にはフランス全土で 370 万人、パリ行進には 50 カ国の首脳級を含めた 120 万人が参加し、わが国からは駐仏大使、中東からもイスラエルやパレスチナの首脳も参加したという。1 月 15 日の読売新聞朝刊の1面には涙を流すムハマンドの風刺画が掲載された政治週刊誌「シャルリー・エブト」の特別号が 14 日発売され、各地で売り切れが続出したことが報道された。このニュースは 2015 年のトップニュースになると思われる。将来、この大事件が悲観論あるいは楽観論の観点から、どのような方向に進んで行くのか注目して冷静に見守りたいと思う。大事件の後の激しく変化した社会状況や世論は、時間とともに減衰するのが一般的であるが、今回の事件は、今後長期間にわたって次第にエスカレートするのではないかと危惧している。

年末年始の期間中、「私学経営」（No.479,私学経営研究会）に掲載された「私の私学考 351」の学校法人北杜学園の学園長が著された「私学経営について考える―北杜学園の経営から―」を熟読する機会があった。そのなかで「敢えて北杜学園の経営理念を一言で記せば、『品位ある学園』であります。」と書かれてあるのが特に記憶に残っている。

2015 年にも学科の新設があり、まだ発展途上にあるといえる本学の創立以来、筆者もまた目標のひとつにしていることは同様に「品位ある学園」なのである。

学長として学ぶことも多く残っている現在、常に前向きに、いかにして現在関係している分野に貢献するかが最小限の望みである。